

国立歴史民俗博物館蔵後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』 解題と翻刻

Emperor Gonara's Handwritten Manuscript of "Shika Wakashū (Collection of Verbal Flowers)" Held by the National Museum of Japanese History : Reproduction with Explanatory Notes
SAKAI Shigeyuki

酒井茂幸

はじめに

国立歴史民俗博物館蔵後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』(日一四三二)は、後奈良天皇が大覚寺准后義俊のために書写・下賜し、以後禁裏に差し戻された伝本であり(後掲書写奥書・添状(日一四三二)参照)、重要文化財に指定されている。国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本が高松宮妃より国に寄贈されるのに先行して国が購入した資料であるため、国立歴史民俗博物館では独立した資料番号・コレクション名で管理されているが、高松宮家伝来禁裏本の蔵書群と一具を成す。伝来の由緒が確かな一方で、南北朝期写の伝二条為忠筆・高松宮家伝来禁裏本『詞花集』(以下「高松宮本『詞花集』」と略称)(日一六〇〇―一八)が精撰過程の面影を残す善本と重視されてきたこともあり、従来その本文や伝来については殆ど検討されてこなかった。

近時、当該本の他本との本文異同を精査したところ、四首の誤脱歌を有するものの、高松宮本『詞花集』などの善本の本文校訂や本文批判に

資する重要な伝本であることが明らかになった。そこで本稿では、後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』の書誌や本文などに関する解題を付した上で、全文翻刻を行った。なお、『詞花和歌集』は、崇徳天皇が上皇時代の天養元年(一一四四)六月、藤原顕輔に院宣を下して撰集させ、顕輔が仁平元年(一一五二)に奏覧した、第六番目の勅撰集である。

解題

まず、『高松宮家伝来禁裏本目録』(「分類目録編」と「奥書・刊記集成・解説編」の二分冊。国立歴史民俗博物館、二〇〇九)を参考にしつつ書誌を掲げる。

縦二五・九糎×一七・七糎。綴葉装一冊本。焦香色地に金切箔切紙、銀泥菊花文、金砂子を散らした鳥の子の表紙(後補か)左肩に題簽(外題)「詞花和歌集」(人參色地に上部薄墨龍文)。見返し金箔に菊花文。内題「詞花和歌集卷第一(〇巻第十)」。鳥の子紙。全七八丁。一括り一九丁・二括り二〇丁・三括り二〇丁・四括り一九丁。半丁空白に続き本文、空

白二丁の後に奥書、後余紙四丁。半丁一〇行。和歌一首一行書。詞書二字下がり。桐の外箱（中央に「後奈良院宸翰／詞花集」と貼紙）、漆の内箱に収納される。天文一三年写。総歌数四一首。書写奥書は以下のとおり。

右倭歌集一冊者依大覚寺／准后所望遂全部写功／猶令再読之校合者也／（二行分空白）／于時天文十二年九月廿三日／（花押）後奈良天皇）
尊朝法親王（天文二年（一五五二）—慶長二年（一五九七））自筆書状を附属する。二紙（楮紙包入）。本文を掲げた上で口語訳を試みる。宛名の玉泉院は不明である。

〔本文〕

此詞花集一冊後奈良院宸筆（有勅判）末代不類之証本不可過之候、若輩任聊爾之思候者、不可有其本候、禁中江於今進上者不依何時可遂馳走候者也／十一月廿日（花押）尊朝法親王）／（切封墨引）／玉泉院とのへ

〔口語訳〕

この詞花集一冊は、後奈良院宸筆（勅判がある）で末の世に比類ない証本としてこれに過ぎるものはありません。若輩である私が愚考致しますに、その本は私が所持すべきではありません。禁中に今は進上致したく、いつでも尽力を致します。十月二十日。

玉泉院殿へ

これによると、後奈良天皇が大覚寺准后義俊のために書写校合して下賜した当該の『詞花和歌集』は、いつしか尊朝法親王の手にわたり、禁裏に進上されたことが分かる。

次に『詞花和歌集』の従来の系統分類を略記した上で当該本の位置を明らかにする。

『詞花和歌集』の諸本は、井上宗雄によると、成立の段階で、I初度本と被除歌・古歌を除いたII二度本（精撰本）とに大別され、IではA初度本、B中間本の二類、そのAでは二六三（『新編国歌大観』番号）の有無によって（一）（二）の二種、Bも諸徴証の基準による下位分類が

成され、II二度本系統も二類各二種に分類される（『天理図書館善本叢書 和歌之部六九 後撰和歌集 詞花和歌集』（天理大学出版部、一九八四）解説）。後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』は、II二度本系統に含まれる。以下にII二度本系統の細分とそれぞれの性格を記す。

- （一） 冒頭部に乱れのある系統
- （二）（ア）二度本として一応成立後、『金葉集』との重複歌が抹消された段階の伝本

（イ）二度本としての本文の確定した系統。四〇九首本。

当該本は「（一）冒頭部に乱れのある系統」とされる（前掲井上解説）。確かに、『新編国歌大観』の底本である高松宮本『詞花集』と比較すると、二丁裏から三丁表にかけて歌順が異なる上二首の脱落がある。ここで該当箇所を『新編国歌大観』番号を（ ）内に付して掲げよう。

梅花遠薫といふことをよめる

源時綱

明^{マユ}くれば香をなつかしみ梅花ちらさぬほどの春風もかな（九）

鷹司殿の七十賀の屏風に、子日したるかたかきたる所に

赤染衛門

万代のためしに君かひかるればねの日の松もうらやみやせん（七）

題しらす

俊恵法師

まこも草つのくみわたる沢辺にはつなぬ駒もはなれさりけり（一二）

僧都覚雅

もえ出る草葉のみかはをかき原こまのけしきも春めきにけり（一三）

梅の花をよめる

右兵衛督公行

桜花にほひを道のしるへにてあるしもしらぬ宿にきにけり（一〇）

実は、高松宮本『詞花集』に存し、後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』に無い八・一一番歌は詞書と作者名に切り出し符号があり、作者名の下に小書で「依御定止了」とある。この点については後述するが、精撰過程での除棄による混乱が歌順の乱れを誘発した可能性がある。また、高松

宮本『詞花集』に加え、東北大学附属図書館蔵三春秋田家旧蔵本（以下「東北大本」と略称）や陽明文庫蔵本などの前述（二）（イ）のいわゆる完全な精撰本（二度本）には無い次掲の二首を含む（一）は本稿の通し番号。以下同様。

京極前太政大臣家にて哥合し侍けるに

大藏卿匡房

君か代はくもりもあらしみかさ山嶺の朝日のさ、むかきりは（二六二）

天喜四年四月晦日后宫歌合によませ給ける

後冷泉院御製

なかはまのまさこのかすも何ならしつきせすみゆる君かみち哉

（二六七）

この点からは当該本は、精撰の最終段階の本文を伝えていることになる。井上宗雄は、前者は俊成筆切に存し、両首ともかなり多くの古写本に入っているため、「恐らく詞花集初度本には入っていたが」清輔か誰か、身近の人の注意によって切出されたのではないかと推測する（井上宗雄・片野達郎校注『詞花和歌集』〈笠間書院、一九七〇〉解題）。

なお、後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』には、諸本に比して以下の四首を欠脱する（校訂は高松宮本『詞花集』に拠る。歌番号は『新編国歌大観』に拠る）。八・一一番歌は高松宮本『詞花集』では、前述のとおり、詞書と作者名に切り出し符号があり、前掲の東北大本や陽明文庫蔵本に無いため除外した。

左衛門督家成か家に歌合し侍けるによめる

藤原範保依御定止了

いかならむことのはにてかなひくへきこひしといふはかひなかりけり（一九九）

左衛門督家成が家に歌合し侍けるによめる

藤原範綱依御定止了

すみよしのあさ、はらをののわすれみつたえくならてあふよしもかな（二三九）

新院位におはしまし、時、中宮春宮の女房はかなきことによりいとみかはして、かたちちめうへのをのこともをかたわき、こらにつけつ、歌をよみかはしけるに、上、中宮の御方にわたらせ給けるを、方人にとりたてまつりてなん、さるへきこと言ひつかはせとをのく申ければ、よみてつかはしける

新院御製

ひさかたのあまのかくやまいつるひもわかたにこそひかりさすらめ（三七九）

右兵衛督公行めにをくれて侍けるころ、女房につけてまさする事侍ける御返事によませ給ける

新院御製

いつるいきのいるをまつまかたきよをおもひしるらんそてはいかにそ（四〇三）

ところで、高松宮本『詞花集』には、詞書・作者名・和歌などに切り出し符号があり、「依御定止了」とするものが六首あり、三首が崇徳院、他は範綱・頼保・盛経である。藤原清輔『袋草紙』に拠ると、撰者藤原顕輔が崇徳院に奉ったのに対して、「御製少々并藤原範綱・頼保・同盛経等」を除くよう命ぜられ、なおいくらかの古歌を切り出し、あらためて撰進、奏覧に供し、歌数は四〇九首であったという。高松宮本『詞花集』はこの『袋草紙』の記事に照応し、被棄歌六首を除くと四〇九首になる。最善本とされ、『新編国歌大観』や『詞花集総索引』、『新日本古典文学大系』の底本に採用された所以である。本稿では、以下に、解釈に関わる主要な異同を詞書・作者・和歌に分けた上で表示した（歌番号は翻刻に一致。上段が後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』・下段が高松宮本『詞花集』）。

〔詞書〕		(後奈良天皇宸翰)		(高松宮本)		
九番歌	題しらす	春こまをよめる		一四番歌	たかまかけし	たかそめかけし
八三番歌	給ての後	給ての		五九番歌	まつほとは	まつ人は
一七三番歌	みちさたに	みちさた		四三番歌	山明の花	山吹の花
同	わすられて	わすれて		四四番歌	山明の	やまふきの
一八二番歌	あるしにあひて	あるしに		六四番歌	いはてほすらん	いかてほすらん
二〇〇番歌	つづくにの	つづくに		六五番歌	まさるなる覽	まさる
二一七番歌	きゝて	きて		八三番歌	すみまの袖	すみそめの袖
二二二番歌	女をうらみてよめる	(ナシ)		八八番歌	あさせたとれは	あさせたとるも
二三九番歌	しのひ侍ける	ものいひ侍ける		九八番歌	雲明はらふ	雲ふきはらふ
二四四番歌	わすらて	わすられて		一〇六番歌	風明ぬなり	風吹ぬなり
二五九番歌	侍らさりけるか	侍らさりければ		一〇九番歌	つゆ明むすふ	つゆふきむすふ
三七一番歌	匡房	卿匡房		一一三番歌	きる人なしに	しる人なしに
同	きりかへて	たてかへて		一四六番歌	このはかくれも	このしたかけも
三八二番歌	円融院	円融院御時		一四七番歌	身とやしらすや	身とやしらすや
〔作者〕				一四九番歌	明ぬらん	ふきぬらん
一九番歌	京極前太政大臣	(ナシ)		一六一番歌	ちよはかそへん	ちよのかすつむ
八一番歌	僧都清胤	僧都清因		一六四番歌	祈くる	祈つる
九九番歌	源頼綱朝臣	藤原頼綱朝臣		一八四番歌	行めぐり	行かへり
一一一番歌	寂照法師	寂昭法師		二〇一番歌	あはれおもひは	あはぬおもひは
一八二番歌	僧都清胤	僧都清因		二〇二番歌	心はくも	心よはくも
二五〇番歌	平公誠	平兼盛		二〇五番歌	ひとたひは	ひとかたに
二五六番歌	高階章行朝臣女	高階行章朝臣女		二一〇番歌	思ふ比かな	おもふかな
二八六番歌	藤原為真	藤原為実		二二六番歌	こほりして	こほりしく
三二四番歌	和泉式部	(ナシ)		二五〇番歌	おちてみたる、	おちてみた
〔和歌〕				二五三番歌	なかゝらぬ	なからへぬ
七番歌	明くれは	ふきくれは		二八二番歌	浪のよりこと	なみのたちこと
				二九三番歌	雲もなく	くまもなく

三〇〇番歌 みねまでも

みねにても

三〇一番歌 すめる月かけ

すめる月かな

三三八番歌 こめられて

はなたれて

三四六番歌 あくかれそむる

あくかれいつる

三五六番歌 あはんとおもへは

あはむとすらん

三六八番歌 うき世のやみを

うき世のなかを

三七六番歌 夢にそ有ける

ゆめにさりける

三八〇番歌 つむ物は

つむはなは

三九四番歌 おもふおりも

思ふことも

三九五番歌 おひたゝて

おひたえて

四〇一番歌 あれはなりけり

あはれなりけり

四〇三番歌 みなれけるかな

みそめけるかな

翻刻

【凡例】

一、後奈良天皇宸翰『詞花和歌集』の全文翻刻である。

二、漢字・仮名の別、仮名遣、傍書等は原文のままとしたが、読解の便を考慮し以下のような処置を施した。

1 旧字・異体字はおおむね通行の字体に改めた。

2 半丁の改丁を「」で表し、丁数と表・裏を行間に1オ・1ウの如く略掲した。

3 詞書に最小限の読点を振った。

4 歌頭に通し番号を付した。

【本文】

詞花和歌集巻第一

春

堀河院の御とき、百首歌たてまつりけるに、はるたつこゝろを
よめる
大藏卿匡房

1 氷ぬし志賀のからさきうちとけてさ、浪よする春風ぞ吹
寛平二年内裏哥合に霞をよめる
藤原惟成

2 昨日かもあられ降しはしからきの外山のかすみ春めきにけり
天徳四年内裏哥合によめる」^{1ウ}
平兼盛

3 故さとは春めきにけりみよしの、みかきか原を霞こめたり
はしめて鶯のこゑを聞てよめる
道命法師

4 たまさかにわか待えたる鶯のはつ音をあやな人や聞らん
たいしらす
曾祢好忠

5 雪きえは多くのわかかなも摘へきに春さへはれぬみ山への里
冷泉院春宮と申ける時、百首歌たてまつりけるによめる
源重之」^{2オ}

6 春日野にあさなくきしの羽音は雪のきえまに若菜つめとや
梅花遠薫といふことをよめる
源時綱

7 明くれは香をなつかしみ梅花ちらさぬほとん春風もかな
鷹司殿の七十賀の屏風に、子日したるかたかきたる所に
赤染衛門

8 万代のためしに君かひかるれはねの日の松もうらやみやせん
題しらす
俊恵法師

9 まこも草つのかみわたる沢辺にはつなぬ駒もはなれさりけり」^{2オ}
僧都覚雅

10 もえ出る草葉のみかはをかさ原こまのけしきも春めきにけり
梅の花をよめる
右兵衛督公行

11 梅花にほひを道のしるへにてあるしもしらぬ宿にきにけり
天徳四年内裏哥合に柳をよめる
平兼盛

12 さほ姫のいとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ

贈左大臣家歌合によめる

源季遠^{3オ}

13 いかなれはこほりはとくる春風にむすほ、るらむ青柳の糸

故郷柳をよめる

源道濟

14 故さとのみかきの柳はるく、とたかまかけし朝みとりそも

題しらす

源頼政

15 み山木その木す多ともみえさりし桜は花にあらはれにけり

京極前太政大臣に哥合し侍けるによめる

康資王母

16 紅のうす花さくらにほはすはみなしら雲とみてや過まし

この哥を判者大納言経信、紅のさくらは詩につくれ^{3ウ}とも歌によ

みたることなし、と申ければ、あしたにかの康資王母のもとへい

ひつかはしける

京極前太政大臣

17 しら雲はたちへたつれとくれなるのうす花さくら心にそ、む

返し

康資王母

18 白雲はさまた、はたて紅のいまひとしほを君しそむれは

おなし哥合によめる

一宮紀伊

19 朝またき霞なこめそ山桜たつね行まのよそめにもみん

大藏卿匡房^{4オ}

20 しら雲とみゆるにしるし御吉野のよしの、山の花さかりかも

承和二年内裏後番哥合によめる

大納言公実

21 やま桜おしむにとまる物ならば花は春ともかきさらしまし

遠山桜といふことをよめる

前斎院出雲

22 九重にたつしら雲とみえつるはおほうち山のさくら成けり

題しらす

戒秀法師

23 春ことに心をそらになす物は雲ぬにみゆるさくらなりけり

白河に花みにまかりてよめる^{4ウ}

源後頼朝臣

24 しら河の春の木す多を見わたせは松こそ花の絶まなりけれ

所くの花をたつぬといふことをよませ給ける

白河院御製

25 春くれは花の梢にさそはれていたらぬ里のなかける哉

橘俊綱朝臣のふしみの山庄にて、水辺桜花といふ事をよめる

源師賢朝臣

26 池水のみきはならずは桜花かけをも浪におられましやは

一条院の御とき、ならの八重さくらを人のたて^{5オ}まつりて侍ける

を、そのおり御前に侍ければ、その花をたまひて哥よめとおほせ

られければよめる

伊勢大輔

27 いにしへのならの都の八重桜けふこ、のへに匂ひぬる哉

新院のおほせにて百首哥たてまつりけるによめる

左近中将教長

28 ふるさとにとふ人あらは山さくらちりなん後をまてとこたへよ

人くあまたくして桜の花を手ことにおりてかへるとよめる^{5ウ}

源登平

29 桜花手ことにおりてかへるをは春のゆくとや人はみるらむ

たいしらす

道命法師

30 春ことにみる花なれとことしよりさきはしめたる心ちこそすれ

帰雁をよめる

贈左大臣母

31 ふるさとの花のほひやまさるらんしつ心なく帰るかりかね

源忠季

32 中くちるをみしとや思ふ覧花のさかりにかへる雁かね

桜のはなのちるをみてよめる

藤原元真^{6オ}

33 さくら花ちらさて千代もみてしかなあかぬ心はさても有やと

天徳四年内裏哥合によめる

大中臣能宣朝臣

34 桜花風にしちらぬ物ならば思ふことなき春にそあらまし

大皇太后宮のかもいつきときこえ給ひける時、人々まいりてま

りつかうまつりけるに、硯の箱のふたに雪を入ていたされてはへ

りけるしきかみにかきつけはへりける

撰津

35 さくら花ちりしく庭をはらはねはきえせぬ雪と成にける哉⁶

すみあらしたる家の庭に、さくらの花のひまなくちりつもりて侍けるをみてよめる
源俊頼朝臣

36 はく人もなき故さとの庭の面は花ちりてこそみるへかりけれ

橋俊綱朝臣伏見の山庄にて、水辺落花といふことをよめる
源師賢朝臣

37 桜さく木のした水はあざけれとちりしく花の淵とこそなれ

藤原兼房朝臣にて、老人惜花といふことをよめる
藤原範永朝臣⁷

38 ちる花もあはれとみすやいそのかみふりはつるまでおしむ心を

庭のさくらのちるを御覽してよませ給ける
花山院御製

39 わかやとの桜なれともちるをりは心にえこそまかせさりけれ

さくらはなのちるをみてよめる
源俊頼朝臣

40 身にかへておしむにとまる花ならばけふや我世のかきりならまし

落花満庭といふ事をよめる
花園左大臣

41 庭もせにつもれる雪とみえなからかほるそ花のしるし成ける⁷

題しらす
大中臣能宣朝臣

42 ちる花にせきとめらる、山川のふかくも春のなりにける哉

寛和二年内裏哥合によめる
藤原長能

43 一枝にあかぬにほひをいと、しく八重かさなれる山明の花

麗景殿女御家哥合によめる
よみひとしらす

44 八重さけるかひこそなけれ山明のちらはひとへもあらしと思へは

堀河院御時、百首哥たてまつりけるによめる
太皇太后宮肥後⁸

45 こぬ人を待かね山のおよふこ鳥おなし心にあはれとそきく

新院位におはしましし時、牡丹をよませ給けるによみ侍ける
関白前太政大臣

46 さきしよりちりはつるまでみし程に花の本にてはつかへにけり

老人惜春といふ事をよめる
橋俊成

47 おいてこそ春のおしさはまさりけれいまいくたひもあはしと思へは

三月尽の日、うへのをのことも御前にめして、春のくれぬる心をよませ給けるに⁸よませたまひけ
新院御製

48 おしむとてこよひかきをくことの葉やあやなく春の形見なるへき

(七行分空白)⁹
詞花和歌集卷第二
夏

卯月一日よめる

49 けふよりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらん
たいしらす
俊頼朝臣

50 雪の色をぬすみてさける卯花はさえてや人にうたかはらむ

斎院の長官にて侍けるか、少将になりて、賀茂祭の使してはへりけるを、めつらしきよしを人のいはせて侍ければよめる⁹
大藏卿長房

51 年をへてかけしあふひはかはらねと今日のかさしのめつらしき哉

神祭をよめる
源兼昌

52 さかきとる夏の山ちや遠からん夕かけてのみまつる神哉

郭公をまちてよめる
周防内侍

53 昔にもあらぬ我身にほと、きすまつ心こそかはらさりけれ

関白前太政大臣の家にて、郭公の哥をのく十首つ、よませはへりけるによめる
藤原忠兼¹⁰

54 ほと、きす鳴音ならては世の中に待こともなき我身成けり

たいしらす
花山院御製

55 ことしたにまつはつ声を時鳥よにはふるさて我にきかせよ

山寺にこもりて侍けるに、時鳥のなき侍らさりければよめる

56 山さとのかひこそなけれほと、きす都の人もかくや待らむ
道命法師

題しらす

能因法師

57 やまひこのこたふる山の郭公ひと声なけは二声そきく

藤原伊家

58 郭公あかつきかけてなく声をまたぬね覚の人や聞覧¹⁰」

大納言公教

59 待ほとはぬる夜もなきを時鳥なく音は夢の心地こそすれ

閑中郭公といふ事をよめる

源俊頼朝臣

60 なきつとも誰にかいはんほと、きすかけよりほかに人しなけれは

たいしらす

待賢門院堀河

61 こやの池におふるあやめのなかきは引しら糸の心ちこそすれ

土御門右大臣の家に歌合し侍けるによめる

源頼家朝臣

62 夜もすからた、く水鶏は天の戸をあけて後こそ音せさりけれ¹¹」

題しらす

皇嘉門院治部卿

63 五月雨の日をふるま、にす、か河やせの浪そ音まさるなる

堀河院御とき、百首歌たてまつりけるによめる

大藏卿匡房

64 わきもこかこやのしのやの五月雨にいはてほすらん夏引の糸

右大臣家の歌合によめる

源忠季

65 さみたれに難波ほり江のみをつくしみえぬや水のまさるなる覽

郁芳門院の菖蒲根合によめる

中納言通俊¹¹」

66 もしほやくすまのあま人うちたえていとひやすらむ五月雨のそら

藤原通宗朝臣哥合し侍けるによめる

良暹法師

67 さみやみ花たちはなに吹かせはたかさとまでかにほひ行らん

よをそむかせ給て後、はな橘を御覽してよせせ給ける

花山院御製

68 やとちかく花たちはなほほりうへし昔をしのふつまと成けり

なてしこのはなをみてよめる

藤原経衡

69 うすくこくかきほにほふなてしこの花の色にそ露も置ける¹²」

贈左大臣の家に歌合し侍けるによめる

修理大輔顯季

70 たねまきしわかなてしこの花盛いくあさ露のをきてみつらん

寛和二年内裏歌合によめる

大式高遠

71 なく声もきこえぬもの、かなしきはしのひにもゆる螢成けり

六条右大臣の家に哥合し侍けるによめる

よみ人しらす

72 さみやみう河にともすか、り火の数ます物はほたる成けり

水辺納涼といふ事をよめる¹²」

藤原家経朝臣

73 風ふけは河辺涼しくよる浪のたちかへるへき心ちこそせね

題しらす

曾祢好忠

74 袖河のいかたの床のうき枕夏はす、しきふしとなりけり

長保五年、入道前太政大臣の家に哥合し侍けるによめる

源通濟

75 待程に夏の夜いたく深ぬれはおしみもあへす山のはの月

たいしらす

曾祢好忠

76 河上に夕立すらしみくつせくやなせのさなみ立さはく也

閏六月七日よめる

太皇太后宮大式¹³」

77 つねよりもなけきやすらむ七夕はあはまし暮をよそになかめて

題しらす

相模

78 下紅葉ひとはつ、ちる木のしたに秋とおほゆるせみの声哉

題しらす

曾祢好忠

79 むしの音はまたうちとけぬ草むらに秋をかねてもむすふつゆかな

(四行分空白)¹³」

曾祢好忠

詞花和歌集卷第三

秋

たいしらす

曾祢好忠

80山城のとはたのおもをみわたせはほかに今朝そ秋風はふく

撰津国にすみ侍ける比、大江為基任はて、のほりはへりければ、

いひつかはしける

僧都清胤

81きみすまはとはまし物をつのくにの生田のもりの秋の初かせ

七月七日、式部大輔資業かもとにてよめる

橋元任¹⁴

82萩の葉にすかく糸をもさ、かには七夕にとやけさはひくらん

御くしおろさせ給ての後、七月七日よませ給ける 花山院御製

83たなはたにころもぬきてかすへきにゆ、しとやみんすみそめの袖

承和二年内裏哥合によめる

藤原顕綱朝臣

84七夕に心はかすとおもはねとくれゆく空はうれしかりけり

題しらす

加賀左衛門

85いかなれはとたえそめけん天河逢せにわたすかさ、きの橋

新院仰にて百首哥たてまつりけるによめる¹⁴

左京大夫顕輔

86あまの河よこさる雲やたなはたの空たき物のけふりなるらん

寛和二年内裏哥合によめる

大中臣能宣朝臣

87おほつかなかはりやしにしあまの河年に一たひわたるせなれば

七夕によめる

修理大夫顕季

88天河たまはしいそきわたさなんあさせたとればよの深ゆくに

橋俊綱朝臣のふしみの山庄にて、七夕後朝のこゝろをよめる

良暹法師

89逢夜とはたれかはしらぬたなはたのあくる空をもつ、まさらなん¹⁵

藤原顕綱朝臣

90七夕のまちつる程のくるしさとあかぬわかれといつれまされり

題しらす

祝部成仲

91あまのかはかへらぬ水を七夕はうらやましとや今朝はみるらん

三条太政大臣の家にて八月十五夜に、水上月といふ事をよめる

92水きよみやとれる月の影さへや千代まで君とすまむとすらん

たいしらす

源順

93いかなれはおなし空なる月影の秋しもことにてりまさるらん

家にて歌合し侍けるに¹⁵

左衛門督家成

94春夏に空やはかはる秋の夜の月しもいかてりまさるらん

月を御覧してよませ給ける

三条院御製

95秋に又あはむあはしもしらぬ身は今夜はかりの月をたにみん

題不知

天台座主明快

96ありしにもあらず成ゆくよの中にかはらぬものは秋のよの月

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原重基

97秋の夜の月の光のもる山は木のしたかけもさやけかりけり¹⁶

ひえの山の念仏にのほりて、月をみてよめる

良暹法師

98天つかせ雲明はらふたかねにているまてみつる秋のよの月

京極前太政大臣の家哥合によめる

藤原顕綱朝臣

99秋のよの月に心そひまもなき出るをまつと入をおしむと

関白前太政大臣の家にて、八月十五夜のこゝろをよめる

藤原朝隆朝臣

100ひく駒にかけをならへて逢坂の関ちよりこそ月は出けれ

左衛門督家成家にて哥合し侍けるに¹⁶よめる

隆縁法師

101秋の夜の露もくもらぬ月をみてをき所なきわか心かな

月を待こゝろをよめる

大江嘉言

102あきの夜の月まちなかて思ひやる心いくたひ山をこゆらむ

月浮山水といふこゝろをよめる

藤原忠兼

103秋山のし水はくましにこりなはやとれる月のくもりもそする

寛和二年内裏歌合によませ給ける

花山院御製¹⁷

- 104 あきの夜の月にこゝろのあくかれて雲ゐに物を思ふ比かな
たいしらす 源道濟
- 105 ひとりゐてなかむるやとの萩の葉に風こそわたれ秋の夕暮
大江嘉言
- 106 萩の葉にそゝやあき風明ぬなりこほれやしぬる露のしら玉
和泉式部
- 107 秋ふくはいかなる色の風なれば身にしむはかりあはれなるらん
曾祢好忠
- 108 みよし野のきさやまかけにたてる松いく秋かせにそなれきぬ覧
藤原顯綱朝臣^{17ウ}
- 109 おきの葉につゆ明結ふこからしの音そ夜寒に成まさるなる
霧をよめる 源兼昌
- 110 夕霧に梢もみえずはつせ山いり逢の鐘の音はかりして
法輪へまうてけるに、さか野の花おもしろくさきて侍けるをみて
よめる 赤染衛門
- 111 秋の野の花みる程の心をは行とやいはんとまるとやいはん
賀茂のいつきときこゑける時、本院のすいかきにあさかほの花の
さきかゝりて侍けるをよめる 祿子内親王^{18オ}
- 112 神かきにかゝるとならばあさかほも夕かくるまでにははさらめや
堀河院御時、百首哥たてまつりけるによめる 隆源法師
- 113 ぬしやたれきる人なしに藤はかまみれは野ことにほころひにけり
白河院、鳥羽殿にて前裁合せさせたまひけるによめる 周防内侍
- 114 あさなゝ露をもけなる萩か枝に心をさへもかけてみる哉
敦輔王
- 115 おきのはにことゝふ人もなき物をくる秋ことにそよとこたふる
たいしらす 曾祢好忠^{18ウ}
- 116 秋の野の草むらことにをく露はよるなく虫の涙なるへし
永源法師
- 117 八重むくらしけれるやとは夜もすから虫の音きくそとり所なる
和泉式部
- 118 なく虫のひとつ声にもきこえぬはこゝろくに物やかなしき
みちの国の任はてゝのほり侍けるに、をはりのくにのなるみ野に
すゝむしの鳴けるをよめる 橘為仲朝臣
- 119 故さとはかはらさりけりす、虫のなるみの野辺の夕暮のこゑ
天祿三年女四宮哥合によめる^{19オ} 橘正通
- 120 秋風に露を涙となく虫のおもふ心を誰にとはまし
駒迎をよめる 大藏卿匡房
- 121 相坂の杉まの月のなかりせはいく木のこまといかてしらまし
永承五年一宮哥合によめる 出羽弁
- 122 大きく人のなとやすからぬ鹿の音はわか妻をこそ恋てなくらめ
たいしらす 藤原伊家
- 123 秋はきを草の枕に結ふ夜はちかくも鹿の声を聞哉^{19ウ}
九月十三夜に、月照菊花といふ事をよませ給ける 新院御製
- 124 あき深み花には菊のせきなればした葉に月ももりあかしけり
関白前太政大臣家にてよめる 源雅光
- 125 霜かる、はしめとみすはしら氣のうつろふ色をなけかさらし
題しらす 道命法師
- 126 ことし又さくへき花のあらはこそうつろふ菊にめかれをもせめ
曾祢好忠
- 127 草かれの冬までみよと露霜のをきて残せるしら氣のはな^{20オ}
宇治前太政大臣、白河にて、見行客といふ事をよめる 堀河右大臣

- 128 関こゆる人にとは、やみちのくのあたちのまゆみ紅葉しにきや
むさしの国よりのほり侍けるに、三川のくにふたむら山の紅葉を
みてよめる 橘能元
- 129 いくらともみえぬ紅葉のにしき哉たれふたむらの山といひけん
寛治元年大皇太后宮歌合によめる 大藏卿匡房
- 130 夕されはなにかいそかむ紅葉はの下てる山はよるもこへなん²⁰
たいしらす 曾祢好忠
- 131 山さとはゆき、の道もみえぬまで秋の木のはにうつもれにけり
春より法輪にこもりて侍ける秋、おほゑ河に紅葉のひまなく流け
るをみてよめる 道命法師
- 132 春雨のあやをりかけし水の面に秋は紅葉のにしきをそしく
雨後落葉といふことをよめる 源俊頼朝臣
- 133 名残なく時雨の空ははれぬれとまたふる物は木のは成けり
月のあか、りけるよ、紅葉のちるをみてよめる²¹ 平兼盛
- 134 あれはて、月もとまらぬ我やとに秋の木のはを風ぞ明ける
一条摂政の家のしやうしに、あしろにもみちのひまなくよりたる
かたかけるところをよめる 藤原惟成
- 135 秋ふかみもみちをちしくあしろ木はひをのよるさへあかくみえけり
はつ霜をよめる 大中臣能宣朝臣
- 136 はつ霜もをきにけらしな今朝みれば野へのあさちも色付にけり
雨中九月尽といふことをよめる²¹ 前大納言公任
- 137 いつかたへ秋のゆくらんわかやとにこよひはかりはあまやとりせて
(八行分空百)²² 詞花和歌集巻第四
- 冬
題しらす 曾祢好忠
- 138 何こともゆきていのらむと思ひしに神無月にも成にける哉
曾祢好忠
- 139 ひさきおふる沢辺のちはら冬くれはひはりの床そあらはれにける
家に哥合しはへりけるに、落花をよめる 大式資通
- 140 こすゑにてあかさりしかは紅葉はのちりしく庭をはらはてそみる
たいしらす 左衛門督家成
- 141 色く染るしくれにもみち葉はあらそひかねてちりはてにけり²²
大江嘉言
- 142 山深みおちてつもれる紅葉はのかはけるうへに時雨ふる也
落葉埋水といふことをよめる 惟宗隆頼
- 143 いまさらになのかすみかをた、しとて木のはのしたに鴛ぞ鳴なる
落葉こゑありといふことをよめる
- 144 風ふけはならのうらはのそよくといひあはせつ、いつち散らん
たいしらす 曾祢好忠
- 145 とやまなるしはのたち枝に吹風のときくおりそ冬は物うき
よみ人しらす²³
- 146 秋は猶このはかくれもくらかりき月は冬こそみるへかりけれ
東山に百寺をかみ侍けるに、しくれのしけれはよめる 左京大夫道雅
- 147 もろ友に山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらすや
旅宿時雨といふことをよめる 瞻西法師
- 148 いほりさすならの木かけにもる月のくもるとみれば時雨ふる也
天曆御時、御屏風に、あしろに紅葉おほくよりたる方かける所に
よめる 平兼盛²³
- 149 みやまには嵐やいたく明ぬらん網代もたはに紅葉つもれり
鷹狩をよめる 藤原長能
- 150 あられふるかた野のみの、狩衣ぬれぬやとかす人しなけれは
堀河院御とき、百首哥たてまつりける中によめる 大藏卿匡房
- 151 山ふかみやく炭かまの煙こそやかて雪けの雲と成けれ

大和守にて侍ける時、入道前太政大臣のもとにてはつ雪をよめる

藤原義忠朝臣

152 年をへてよしの、山にみなれたるめにめつらしき今朝の初雪^{24ウ}

たいしらす

大江嘉言

153 ひくらしに山路のきのふ時雨しは富士のたかねの雪にそ有ける

大蔵卿匡房

154 おく山のいはかき紅葉ちりはて、くち葉かうへに雪そつもれる

新院位にをはしまし、時、雪中眺望といふことをよませ給けるに

よみ侍ける

関白前太政大臣

155 くれなゐとみえし梢も雪ふれはしらゆふか、る神なひの杜

題しらす

和泉式部

156 侍人のいまもきたらはいか、せむふま、くおしき庭の雪かな^{24ウ}

歳暮のこゝろをよめる

成尋法師

157 かすならぬ身にさへ年のつもる哉老は人をもきはさりけり

曾祢好忠

158 たま、つる年のをはりに成にけりけふにや又もあはんとすらむ

(四行分空白)^{25ウ}

詞花和歌集巻第五

賀

一条院上東門院に行幸せさせ給けるによめる 入道前太政大臣

159 君か代にあふくま河のそきよみ千とせをへつ、すまむとそ思ふ

正月一日子うみたる人にむつきつかはすとよめる 伊勢大輔

160 めつらしくけふたちそむる鶴のこはちよのむつきをかさぬへき哉

一条左大臣家のしやうしに、住吉のかたかきたる所によめる

大中臣能宣朝臣^{25ウ}

161 過ぎにし程をはすてつことしより千代はかそへん住吉の松

京極前太政大臣にて哥合し侍けるに 大蔵卿匡房

162 君か代はくもりもあらしみかさ山嶺の朝日のさ、むかきりは

長元八年うちの前太政大臣家歌合し侍けるによめる 能因法師

163 きみかよはしら雲か、るつくはねの峯のつ、きのうみとなるまで

たいしらす

赤染衛門

164 さか木葉をてにとりもちて折くる神のよ、りも久しからなん

三条太政大臣の賀の屏風の絵に、花みて帰^{26ウ}人かきたる所によめる

165 あかてのみかへると思へは桜花おるへき春そつきせさりける

或人子三人にかうふりせさせたりける又の日、いひつかはしける

166 松しまの磯にむれゐる蘆たつのをのかさまくみえし千世哉

天喜四年四月晦日后宫歌合によませ給ける 後冷泉院御製

167 なかほまのまさこのかすも何ならしつきせすみゆる君かみち哉^{26ウ}

上東門院御屏風に、十二月晦日のかたかきたる所によめる

168 ひと、せをくれぬとなにかをしむへきつきせぬ千代の春を待には

河原院に人くまかりて哥合し侍けるに、松臨池といふことをよめる 前大納言公任

169 誰にとかいけの心も思ふ覽そことやとれる松の千とせを

後三条院すみよしまうてによめる よみ人しらす

170 君か代の久しかるへきためしにや神もうへけん住吉の松^{27ウ}

俊綱にくしてすみよしにまうて、よめる 大納言つねのふ

171 すみよしのあらひとかみのひさしさに松もいくたひおひかはりけん

(六行分空白)^{27ウ}

詞花和歌集巻第六

別

参議広業絶て後、いよの国のかみにてくたりけるに、いひつかは

別

参議広業絶て後、いよの国のかみにてくたりけるに、いひつかは

参議広業絶て後、いよの国のかみにてくたりけるに、いひつかは

参議広業絶て後、いよの国のかみにてくたりけるに、いひつかは

しける

民部内侍

172 都にておほつかなさならはすは旅ねをいかに思ひやらまし

みちさたわすれて後、陸奥守にてくたりけるに、つかはしける

和泉式部

173 もろ友にた、まし物をみちのくのころもの関をよそに聞哉^{28オ}

左京大夫頭輔加賀守にてくたり侍けるにいひつかはしける

源俊頼朝臣

174 よろこひをくわへにいそく旅なれは思へとえこそと、めさりけれ

橘則光朝臣陸奥守にてくたりはへりけるに、餞し侍とてよめる

藤原輔尹朝臣

175 とまりゐてまつへき身こそ老にけれあはれ別は人のためか

物ましける女の、齋宮のくたり侍けるに、ともにまかりけるに、

いひつかはしける^{28ウ}

藤原道経

176 かへりこむ程をもしらすかなしきはよを長月のわかれ成けり

大納言経信、太宰帥にてくたり侍けるに、かはしりにまかりあひ

てよめる

津守国基

177 むとせにそ君はきまさん住吉のまつへき身こそいたく老ぬれ

つねに侍ける女房の日向の国へくたりけるに、餞給とてよみ給け

る

一条院皇后宮

178 あかねさす日にむかひても思ひ出よ都ははれぬなかめすらむと^{29オ}

弟子に侍けるわらはのおやにくして人の国へまかりけるに、さう

そくつかはすとてよめる

法橋有禪

179 別路の草はをけんたひ衣たつよりかねてぬる、袖哉

月ころ人のもとにやとりて侍けるかかへりける日、あるしにあひ

てよめる

玄範法師

180 又こんと誰にもえこそいひをかね心かなふ命ならねは

もろこしへわたり侍けるを、人のいさめ侍ければよめる

寂照法師²⁹

181 と、まらむと、まらしともおほ、えすいつくもつゐのすみかならねは

ひとのもとにひころはへりて、返日あるしにあひていひ侍ける

僧都清胤

182 ふたつなき心を君にと、めをきてわれさへ我にわかれぬる哉

大納言経信、太宰帥にてくたりはへりけるに、俊朝臣まかりけれ

はいひつかはしける

太皇太后后甲斐

183 くれはまつそなたをのみそなかむへきいてん日毎に思ひをこせよ

橘為仲朝臣陸奥守になりてくたりけるに、^{30オ}太皇太后宮の大盤所

よりとてたれとはなくて

184 あつまちのはるけき道を行めくりいつかとくへき下紐の関

修理大夫あきすゑ、太宰大弐にてくたらむとしはへりけるに、む

まにくしていひつかはしける

権僧正永縁

185 たち別はるかにいきの松なれは恋しかるへき千代のかけかな

あつまへまかりける人のやとりて侍けるか、暁たちけるによめる

く、つなひき

186 はかなくも今朝のわかれのおしき哉いつかはひとをなからへてみし^{30ウ}

(半丁分空白)^{31オ}

詞花和歌集巻第七

恋上

恋の哥とてよみ侍ける

関白前太政大臣

187 あやしくも我み山木のもゆる哉思ひは人につけてし物を

たいしらす

藤原実方朝臣

188 いかてかはおひありともしらすへきむろのやしみの煙ならては

189 かくとたにいはてはかなく恋しなはやかてしられぬ身とや成なん

堀河院の御時、百首哥たてまつりけるによめる^{31ウ}

隆恵法師

- 190 思かねけふたてそむるにしき木の千つかもまた逢よしもかな
大蔵卿匡房
題しらす
平兼盛
- 191 谷河のいはまを分てゆく水の音にのみやはいきかむと思ひし
春たちける日、承香殿女御のもとへつかはしける 一条院御製
- 192 よと、もに恋つ、過る年月はかはれとかはる心ちこそせね
承暦四年内裏哥合によめる 藤原伊家
- 193 わか恋は夢ちにのみそなくさむるつれなき人も逢とみゆれば³²
新院位におはしましし時、うへのをのこともを御前にめして、ね
さめの恋といふこゝろをよませたまひけるによめる
左兵衛督公能
- 194 なくさむる方もなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせは
寛和二年内裏歌合によめる 藤原惟成
- 195 命あらはあふ夜もあらむ世の中なしぬばかり思ふ心そ
左京大夫あきすけか家に哥合し侍けるによめる 大納言成通³²
- 196 よそなからあはれといはむことよりも人つてならていとへとそ思
たいしらす 覚念法師
- 197 恋しなは君はあはれといはすとも中くよその人やしのはん
つれなき女につかはしける 賀茂成助
- 198 いかはかり人のつらさをうらみましうき身のとかと思ひなさは
題しらす 浄蔵法師
- 199 わかためにつらき人をはをきながら何のつみなき世をや恨みん
女をあひかたらへける比、よしありてつのくにのなからといふ所
にまかりて、かの女のもと³³へいひつかはしける 平兼盛
- 200 わするやとなからへゆけと身にそひて恋しきことはをくれさりけり
たいしらす よみ人しらす
- 201 年をへてもゆてふ富士の山よりもあはれおもひはわれそまされる
- 202 わひぬれはしるて忘れんと思へとも心よはくもおつる涙か
203 思はしとおもへはいと、恋しきはいつれかわれか心なるらむ
能因法師
- 204 心さへむすふの神やつくりけんとくるけしきもみえぬ君かな
あたしくもあるましかりける女を、いとしのひて³³いはせ侍
けるを、世にちりてわつらはしきさまに聞えければ、いひ絶て後
とし月をへて思ひあまりていひつかはしける 前大納言公任
- 205 ひとたひは思ひたえにし世の中をいか、はすへきしつのをたまき
三井寺にはへりけるわらはを、京にいてはかならずつげよと契て
侍りけるを、きやうへ出たりとはき、けれとも、をとつれもし侍
らさりければいひつかはしける 僧都覚雅
- 206 影みえぬ君はあまよの月なれや出ても人にしられさりけり³⁴
さらにゆるなき女に、七月七日つかはしけり 大納言道綱
- 207 七夕に今朝ひくいと露をもみたはむけしきをみてややみなん
恋の哥とよめる 隆縁法師
- 208 身の程を思ひしりぬることのみやつれなき人のなさけなる覧
左衛門督家成かつのくにの山庄にて、旅宿恋といふことをよめる
- 209 わひつ、もおなし都はなくさめきたひねそ恋のかきり成ける
冷泉院春宮と申ける時、百首哥たてまつり³⁴けるによめる 源重之
- 210 かせをいたみ岩うつ浪のをのれのみくたけて物を思ふ比哉
堀河院御時、百首哥たてまつりけるによめる 修理大夫顕季
- 211 わか恋はよし野の山のおくなれや思ひいれとも逢人もなし
題しらす 平祐季
- 212 むねは富士そては清見か関なれや煙も浪もた、ぬ日そなき
藤原永実
- 213 いたつらにちつかくちにしにしき木は猶こりすまに思ひたつ哉

- 春になりてあはむとたのめたる女の、さもある³⁵ましけにみえけ
れは、いひつかはしける 道命法師
- 214 山桜ついにさくへき物ならは人の心をつくさ、らなん
堀河院の御時、藏人にてはへりけるに、贈皇太宮の御方に侍りる
女を、しのひてかたらひ侍けるを、こと人に物いふとき、てしら
菊の花にさしてつかはしける 源家時
- 215 霜をかぬ人の心はうつろひておもかはりせぬしらくの花
返事、女にかはりて³⁵ 大納言公実
- 216 しら菊のかはらぬ色もたのまれすうつらはてやむ秋しなけれは
中納言俊忠家歌合によめる 原あきつなの朝臣
- 217 紅のこそめのころもうへにきむこひの涙の色かくるやと
題しらす 源道濟
- 218 忍ふれと涙そしるきくれなるに物思ふ袖はそむへかりけり
ふみつかはしける女の、いかなる事かありけん、いまさらに返事
をせさりけれは、いひつかはしける 源雅光³⁶
- 219 紅に涙の色もなりにけりかはるは人の心のみかは
左京大夫あきすけか家にて哥合し侍りけるによめる 平実重
- 220 恋しなむ身こそ思へはおしからねうきもつらきも人のとくは、
たいしらす 道命法師
- 221 つらさをはきみにならひてしりぬるをうれしきことを誰にとはまし
女をうらみてよめる 藤原道信朝臣
- 222 うれしきはいかはかりかは思ふ覽うきは身にしむ物にそ有ける
ひえの山に哥合し侍りけるによめる³⁶ 心覚法師
- 223 恋すれはうき身さへこそおしまるれおなし世にたにすまむと思へは
題しらす 大中臣能宣朝臣
- 224 みかきもるゑしのたく火のよるはもえひるはきえつ、物をこそ思へ
よみ人しらす
- 225 わか恋やふたみかはれる玉くしけいかにすれとも逢方そなき
山てらにこもりて日こる侍て、女のもとへいひつかはしける
藤原範永朝臣
- 226 こほりして音はせねとも山河のしたはなかる、物としらすや
関白前太政大臣家にてよめる³⁷ 藤原親隆朝臣
- 227 風ふけはもしほの煙かたよりになひくを人の心ともかな
題しらす 新院御製
- 228 瀬をはやみ岩にせかる、滝川のわれても末にあはむとぞ思
曾祢好忠
- 229 はりまなるしかまにそむるあなかちに人を恋しと思ふ比哉
冬ころ、くれにあはむといひたる女に、くらしかねていひつかは
しける 道命法師
- 230 程もなくくると思ひし冬の日のこゝろもとなきをりもありけり³⁷
家に哥合しはへりけるによめる 中納言俊忠
- 231 恋わひてひとりふせやによすからおつる涙やとなしの滝
(六行分空白)³⁸ 詞花和歌集卷第八
- 恋下
人しつまりてこ、といひたる女のもとへ、まちかねてとくまかり
たりけれは、かくやはいひつるとて、出あはすはへりけれは、い
ひ入侍りける 藤原相如
- 232 君をわかおもふ心はおほはらやいつしかとのみすみやかれつ、
たいしらす 藤原道経
- 233 我恋はあひそめてこそまさりけれしかまのかちの色ならねとも
女のもとより曉にかへりて、たちかへりいひ³⁸つかはしける
清原元輔
- 234 夜をふかみかへりし空もなかりしをいつくよりをく露にぬれけん

左京大夫顕輔か家に哥合し侍けるによめる

藤原顕広

235 心をはとゝめてこそはかへりつれあやしやなにの暮を待覧

女のもとより夜ふかくかへりて、朝にいひつかはしける

藤原実方朝臣

236 竹の葉に玉ぬく露にあらねともまた夜をこめておきにける哉

なか月の晦日の日のあしたに、はしめたる女のもとよりかへりて、
たちかへりつかはしける」^{39オ}
読人しらす

237 みな人のおしむ日なれと我はたゝ遅く暮行歎をそする

藤原保昌朝臣にくして丹後国へまかりけるに、忍て物いひけるお
とこのもとへいひつかはしける
和泉式部

238 我のみや思ひおこせむあちきなく人は行末もしらし物ゆへ

しのひ侍ける女のもとへいひつかはしける
大江為基

239 おもふことなくて過ぬる世中につるに心をとゝめつる哉

よかれせずまうてきける男の、秋立ける日、そ」^{39ツ}の日しもまうて
こさりければ、あしたにいひつかはしける
一宮紀伊

240 つねよりも露けかりつる今夜かなこれや秋立はしめなる覽

女のもとにまかりたりけるに、おやのいさむれはいまはえなんあ
ふましき、といはせて侍ければよめる
坂上明兼

241 せきとむる岩まの水もをのつから下にはかよふ物とこそきけ

題しらす
恵慶法師

242 逢ことはまはらにあめるいやすたれいよゝ我をわひさする哉

等恋兩人といふことをよめる」^{40オ}
右大臣

243 いつくをもよかるゝことのわりなきにふたつに分る我身ともかな

おとこにわすらてなけきける比、八月はかりに、まへなる前裁の
つゆをよますからなかくてよめる
赤染衛門

244 もろともをきる露のなかりせは誰とか秋のよをあかさまし

たいしらす

曾祢好忠

245 きたりともぬるまもあらし夏のよの在明の月もかたふきにけり

新院位におはしましける時、雖契不來恋といふことをよませ給け
るによみ侍
関白前太政大臣

246 こぬ人を恨もはてし契をきしそのことのはもなさけならずや

題不知
和泉式部

247 夕暮に物おもふ事はまさるかとわれならさらむ人にとは、や

月のあかゝりけるよ、まうてきたりけるおとこの、たちなからか
へりにければ、あしたにいひつかはしける

248 涙さへ出にし方をなかくめつゝ心にもあらぬ月をみしかな

たいしらす
よみひとしらす

249 つらしとて我さへ人を忘なはありとて中のたえやはつへき」^{41オ}

弟子なりける童の、おやにくして人のくにへあからさまにまかり
たりけるか、ひさしく見えさりければ、たよりにつけていひつか
はしける
最厳法師

250 逢ことや涙の玉のをなるらむしはしたゆれはおちてみたるゝ

たのめたるおとこをいまやゝと待けるに、まへの竹のはにあら
れのふりかゝりけるを聞てよめる
和泉式部」^{41ツ}

251 夕かりのゝしはしの恋はさもあらはあれそりはてぬるかやかたおのた

か
かよひける女の、こと人に物申ときゝていひつかはしける
清原元輔

252 竹の葉にあられふるなりさらゝに独はぬへき心地こそせね

程なくたえにけるおとこのもとへいひつかはしける
相模

253 ありふるもくるしかりけりなからぬ人の心を命ともかな

かよひける女の、こと人に物申ときゝていひつかはしける

254 うきなからさすかに物のかなしきは今は限とおもふ成けり

久しく音せぬおとこにつかはしける

俊子内親王大進

255 とはぬまをうらむらさきにさく藤の何とて松にかゝりそめけん^{42オ}

男の絶くになりける比、いか、ととひたる人のかへり事によめる
高階章行朝臣女

256 思ひやれかけひの水のたえく成ゆく程のこゝろほそさを

いとをしくし侍けるわらはの、大僧正行尊かもとへまかりにけれ
は、いひつかはしける
律師仁祐

257 鶯は木つたふ花の枝にても谷のふるすをおもひ忘るな

返事、わらはにはかりて

大僧正行尊

258 うくひすは花のみやこも旅なれば谷のふるすをわすれやはする^{42ウ}

左衛門督家成、なか月のつこもり比にはしめていひそめて、いかなる事かありけん、絶てをとつれ侍らさりけるか、その冬ころさくことのあれは、は、かりてえなんいはぬ、といはせてはへりける返事によめる
皇嘉門院出雲

259 夜をかさね霜と、もにしおきるれはありしはかりの夢をたにみす

家に歌合し侍けるに、あひてあはぬ恋といふことをよめる

中納言国信

260 逢事もわか心よりありしかは恋はしぬとも人はうらみし^{43オ}

藤原仲実朝臣

261 くみ見てし心ひとつをしるへにて野中のし水忘れやはする

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原基俊

262 浅茅生に今朝をく露のさむけくに枯にし人のなそや恋しき

心かはりたるおとこにいひつかはしける

清少納言

263 わすらるゝ身はことほりとしりなから思ひあへぬは涙なりけり

ひさしく音せぬおとこにつかはしける

読人しらす^{43ウ}

264 今よりはとへともいはし我そたゝ人をわするゝことをしるへき

中納言通俊たえ侍にけれはいひつかはしける

よみ人しらす

265 さりとては誰にかいはん今はたゝ人をわするゝ心をしへよ

返し

中納言通俊

266 またしらぬ事はいかておしふへき人をわするゝ身にしあらねは

おなしところなるおとこのかきたえにければよめる

和泉式部

267 いくかへりつらしと人をみくまのゝうらめしなから恋しかるらん

大江公資にわすられてよめる^{44オ}

相模

268 夕暮はまたれし物を今はたゝゆくらん方を思ひこそやれ

題しらす

よみひとしらす

269 わすらるゝ人めはかりを歎にて恋しきことのなからましかは

(六行分空百)^{44ウ}

詞花和哥集卷第九

雑上

所くの名を四季によせて人く哥よみ侍けるに、みしまえの春

の心をよめる

源頼家朝臣

270 春霞かすめるかたや津の国のほのしま江のわたりなるらん

堀川院御時、うへのをのこともを御前にめして哥よませせ給

けるによめる

源俊頼朝臣

271 すまの浦にやく塩かまの煙こそ春にしられぬかすみ成けれ^{45オ}

おなし御時、百首哥たてまつりけるによめる

272 浪たてる松のしつえをくもてにて霞わたれる天の橋たて

播磨守に侍ける時、三月はかりに舟よりのほり侍けるに、津国に

やまちといふ所に、参議為通朝臣しほゆあみて侍とき、てつかは

しける

平忠盛朝臣

273 なかるすな都の花もさきぬらん我もなにゆへいそくつなてそ

修行しありかせ給ひけるに、さくらの花のさきたりけるしたにや

すませ給てよませ給てよませ給ける

花山院御製^{45ウ}

- 274 木の本をすみかとするはをのつから花みる人に成ぬへきかな
人のもとにまかりたりけるに、桜花おもしろくさきて侍ければ、
あしたにあるしの もとへいひつかはしける 天台座主源心
- 275 ちらぬまにいま一たひもみてしかな花にさきたつみともこそなれ
花をおしむ心をよめる 大藏卿匡房
- 276 春くれはあちか、たのみひとかたにうくてふいをのなこそ惜けれ
宇治前太政大臣花見にまかりにけるとき、て」^{46オ}つかはしける
堀川右大臣
- 277 身をしらて人をうらむる心こそちる花よりもはかなかりけれ
二条関白、しら河へ花見になん、といはせて侍ければよめる
小式部内侍
- 278 春のこぬところはなきをしら川のわたりにのみや花はさく覧
入道撰政、やへ山吹をつかはして、いか、みる、といはせて侍け
れはよめる 大納言道綱母
- 279 誰かこのかすはさためし我はた、とへとそ思ふ山吹の花
新院位におはしまし、時、后宮御方に、かんたち」^{46ウ}めうへののを
こともをめして、藤花年久といふことをよませさせ給けるによめ
る 大納言師頼
- 280 かすか山きたの藤なみさきしよりさかゆへしとはかねてしりにき
修理大夫顕季みまさかのかみに侍ける時、人くいさなひて右近
のむまはにまかりて郭公まち侍けるに、俊子内親王の女房二車ま
うてきて、連哥し歌よみなどしてあけほのにかへり侍けるに、か
の女車より
- 281 みまさかやくめのさらやまと思へとも和哥のうらとそいふへかりける」^{47オ}
この返事せよといひ侍ければよめる 贈左大臣
- 282 和哥の浦といふにてしりぬ風ふかは浪のよりこと思ふなるへし
左衛門督家成、ぬの引の滝にまかりて、哥よみ侍けるによめる
- 283 雲よりつらぬきかくるしら玉をたれぬの引の滝といひけん
新院位におはしまし、時、御前にて、水草隔船といふことをよみ
侍りける 大宮卿行宗」^{47ウ}
- 284 難波えのしけき蘆まをこく舟は棹のをとにそゆく方をしる
題しらす 律師済慶
- 285 おもひ出もなくてや我身やみなましをはずて山の月みさりせは
ち、永実信濃守にてくたり侍けるともにまかりてのほりたりける
比、左京大夫顕家家に歌合し侍けるによめる 藤原為真
- 286 なにたかきおはすて山もみしかとも今夜はかりの月はなかりき
月のあかく侍ける夜、人々まうてきてあそひ侍けるに、月入にけ
れは、興つきて」^{48オ}なむとしければよめる 大中臣能宣朝臣
- 287 月は入ひとはいはてなはとまりてひとりや我は空をなかめん
おほんくしおろさせ給て後、六条院の池に月のうつり侍けるを御
覧してよませ給ける 小一条院御製
- 288 池水にやとれる月はそれなからなむる人の影そかはれる
左京大夫顕輔、中宮亮にて侍ける時、下らうにこえらるへしと聞
て、宮の女房のなかなけき申たりける返事に、たれとはなくて」^{48ウ}
- 289 世中をおもひないりそ三笠山さし出る月のすまむかきりは
田家月といふことをよませ給ける 新院御製
- 290 月きよみたなかにたてるかり庵の影はかりこそくもり成けれ
新院位におはしましし時、月のあかく侍りける夜、女房につけて
たてまつらせ侍ける 太政大臣
- 291 すみのほる月の光にさそはれて雲のうへまで行心かな
あれたるやとに月のもりて侍けるをよめる 良暹法師」^{49オ}
- 292 板間より月のもるをもみつる哉やとはあらして住へかりけり
題しらす 内大臣

- 293 雲もなくしのたの森のしたはれて千枝のかすさへみゆる月かな
山家月をよめる 源道濟
- 294 さひしさにいへてしぬへき山さとをこよひの月に思ひとまりぬ
新院殿上にて、海路月といふ事をよめる 平忠盛朝臣
- 295 ゆく人もあまのとわたるこちして雲のなみちに月をみる哉
題しらす 橘為義朝臣⁴⁹
- 296 君まつと山のはいて、やまのはに入まて月をなかめつる哉
堀河院御時、中宮御方にまいりて女房に物申けるほとに、月の山
のはよりたちのほりけるをみて、女の、月はまつにかならずいっ
るなんあはれなる、といひければよめる 大納言公実
- 297 いかなれば待にはいつる月なれと人を心にまかせさるらむ
たいしらす 花山院御製
- 298 心みにほかの月をもみてしかなわかやとからのあはれなるかと
月のあかく侍ける夜、前大納言公任まうてき⁵⁰たりけるを、する
事侍て遅くいてあひければ、まちかねてかへり侍にければ、つか
はしける 中務卿具平親王
- 299 うらめしくかへりける哉月夜にはこぬ人をたに待とこそきけ屏風の絵
に、山の嶺にゐて月みたる人かきたる所によめる 大江嘉言
- 300 かこ山のしら雲かゝるみねまでもおなしたかさそ月はみえける
家に哥合し侍けるによめる 左京大夫顕輔⁵⁰
- 301 夜もすからふしのたかねに雲きえて清見か関にすめる月かけ
山しろのかみになりてなけき侍けるころ、月のあか、りける夜、
まうてきたりける人の、いか、思ふ、と、ひ侍りければよめる
藤原輔尹朝臣
- 302 山しろのいはたの杜のいはすとも心のうちをてらせ月かけ
ひさしくおとせぬ人のもとへ、月のあかき夜いひつかはしける
中原長国
- 303 月にこそむかしのことはおほえけれわれを忘る、人にみせはや
山しな寺にまかりたれけるに、寂延法師に⁵¹あひて夜もすから
物いひ侍けるに、あり明の月みかさの山よりさしのほりたるをみ
てよめる 琳賢法
- 304 なからへは思ひ出にせんおもひ出よきみとみかさの山のはの月
京極前太政大臣家哥合によめる 大藏卿匡房
- 305 逢坂の関の杉はらしたはれて月のもるにそまかせたりける
つくしよりかへりまうてきて、もとすみ侍ける所のありしにもあ
らすあれにけるに、月のいとあかく侍ければよめる⁵¹
帥前内大臣
- 306 つれくゝとあれたるやとをなかむれは月ばかりこそ昔成けれ
題しらす 高松上
- 307 ふかくいりてすまはやと思ふ山のはをいかななる月の出るなるらん
たかひにつ、む事あるおとこのたやすくあはすとらみければ
よめる 和泉式部
- 308 をのか身ををのか心になはぬをおもは、物は思ひしりなん
忍ひけるをとこの、いか、おもひけん、五月五日の朝に、あけて
後かへりて、けふあらはれぬるなん⁵²うれしき、といひたりける
返事によめる
- 309 あやめ草かりにもくらむ物ゆへにねやのつまとや人のみつらん
保昌にわすられて侍ける比、兼房朝臣のとひて侍ければよめる
- 310 人しれす物おもふことはならひにき花にわかぬ春しなければ
藤原盛房かよひける女をかれくゝになりてのち、神無月の廿日比
に時雨のしける日、なにごとかといひつかはしたりければ、母の
かへり事にていへりける
よみ人しらす
- 311 おもはれぬ空のけしきをみるからに我もしくる、神無月哉⁵²

題しらす

待賢門院堀河

312 あた人はしくる、よはの月なれやすむとてえこそ憑ましけれ

たえにけるおとこの、五月はかりに思ひかけすまうてきたりければよめる
よみ人しらす

313 たか里にたたらひかねて時鳥かへる山ちのたよりなるらん

たのめたるよ、みえさりける男の、後にまうてきたりけるに、いてあはさりければ、いひわひて、つらき事をしらせつるなどいはせたりければよめる
清少納言^{53オ}

314 よしさらはつらさは我にならひけりたのめてこぬは誰かをしへし

かきたえたるおとこの、いか、思ひけむ、きたりけるか、帰けるあに、雨のいたくふりければ、あしたにいひつかはしける

江侍従

315 かつきけん袂は雨にいか、せしぬる、はさても思ひしれかし

題しらす

曾祢好忠

316 ふかくしもまたのまさるらん君ゆへに雪ふみわけてよなくそゆく

いたくしのひけるおとこの、ひさしくをとせさりければいひつかはしける^{53ツ}
赤衛染門

317 世の人のまたしらぬまのうす氷みわかぬ程にきえねと思ふ

いひわたりけるおとこの、八月はかり、そでの露けさなどいひたりける返事によめる
和泉式部

318 秋はみな思ふことなき萩の葉も末たわむまで露はをくめり

藤原隆時朝臣ものいひ侍ける女をたえにければ、弟忠清かよひけるも、ほとなくわすれ侍にければ、忠清かおと、隆重かあひぬとさ、て、かの女にいひつかはしける^{54オ}
藤原忠清

319 いかなれはおなし流の水にしもさのみは月のうつるなるらん

題不知

相模

320 住吉のほそ江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな

ものおもひけるころよめる

大納言道綱母

321 ふる雨のあしともおつる涙かなこまかに物を思ひくたけは

おもふ事侍ける比、ゐのねられす侍ければ、よもすからなかめあかして、有明の月のくまなくはへりけるか、にはかにかきくらししくれ^{54ツ}けるをみてよめる
赤染衛門

322 神無月あり明の空のしくる、をまたわれならぬ人やみるらん

しのひに物おもひけるころよめる
出羽弁

323 忍ふるもくるしかりけり数ならぬ身には涙のなからましかは

忍ひけるおとこの、なりけるきぬをかしかまして、をしのけ、れはよめる
和泉式部

324 音せぬはくるしき物を身にちかくなるといとふ人も有けり^{55オ}

おもくわつらひけるに、たちをくれなはえなむなからふましき、といひたるおとこの返事によめる
大式三位

325 人の世にふた、ひしぬる物ならはしのひけりやと心みてまし

題しらす

左大弁俊雅母

326 夕霧にさの、ふな橋音すなりたなれの駒のかへりくるかも

長元八年、宇治前太政大臣の家に歌合し侍けるに、かちかたのおのこともすみよしにまうて、哥よみ侍けるによめる
式部大輔資業^{55ツ}

327 すみの江の波にひたれる松よりも神のしるしそあらはれにける

物へまかりける路に、人のさうふをひきけるを、なかきねやあるとこせけるをおしみ侍ければよめる
周防内侍

328 いかてかくねをおしむらんあやめ草うきには声もたてつへき世を

冷泉院へたかむなたてまつらせ給とてよませ給ける

花山院御製

329 世中にふるかひもなき竹のこはわかつむ年をたてまつるなり

御かへし

冷泉院御製

330 年へぬる竹のよはひをかへしても此世をなくなさむとぞ思⁵⁶」

おとこをうらみてよめる

和泉式部

331 あしかれとおもはぬやまのみねにたにおふなる物を人の歎は

津の国にこそへといふ所にこもりて、前大納言公任かもとへい

ひつかはしける

能因法師

332 ひとふるに山田もる身と成ぬれは我のみ人をおとろかす哉

後二条関白はかなきことにてむつかり侍ければ、家のうちには待

なから、まへ、もさし出侍らて、女房の中にいひ入侍ける」^{56ウ}

源仲正

333 みかさやまさすかにかげにかくろへてふるかひもなきあめのした哉

おほやけの御かしこまりにて侍けるを、僧正深覚申しゆるして侍

ければ、そのよろこひに五月五日まかりてよめる

平致経

334 君ひかす成なましかはあやめ草いかなるねをかけふはかけまし

長恨哥の心をよめる

源道濟

335 思ひかねわかれし野へをきてみればあさちか原に秋かせぞ吹⁵⁷」

みちの国の任はて、のほり侍けるに、たけくまの松のもとにてよ

める

橘為仲朝臣

336 故郷へわれはかへりぬたけくまの松とは誰につけよとか思

世にしつみて侍ける比、かすかの冬の祭にへいたてまつりけるに、

おほえけることをみてくらにかきつけ侍ける

左京大夫顕輔

337 かれはつる藤の末葉のかなしきはた、春の日を憑はかりそ

帥前内大臣あかしに侍ける時、こひかなしみてやまひになりてよ

める」⁵⁷

高内侍

338 よるの鶴都のうちにこめられて子を恋つ、も鳴あかす哉

堀河院御時、百首哥たてまつりけるによめる

大納言師頼

339 身のうさは過ぬるかたを思ふにもいま行末の事そかなしき

大藏卿匡房

340 むもれ木のしたはくつれといにしへの花の心は忘さりけり

題しらす

大納言伊通

341 今はた、むかしそつねに恋らる、残ありしを思ひ出にして

小野宮右大臣のもとにまかりて、昔のことなと」⁵⁸いひてよめる

題しらす

清原元輔

342 老て後むかしをしのふ涙こそこ、ら人めをしのはさりけれ

題しらす

賀茂政平

343 行末のいにしへはかり恋しくは過る月ひもなげかさらまし

新院のおほせにて百首哥たてまつりけるによめる 藤原季通朝臣

344 いとひても猶おしまる、我身かな二たひくへき此世ならねは

神祇伯頭仲、ひろたにて歌合し侍とて、寄月述懐といふことを

よみてとどこひて侍けれつかはしける」^{58ウ}

左京大夫顕輔

345 なのはえのあしまにやとる月みれば我身ひとつはしつまさりけり

(七行分空白)」⁵⁹

詞花和歌集卷第十

雑下

都にすみわひて、あふみにたなかみといふ所にまかりてよめる

源俊頼朝臣

346 あし火たく山のすみかは世中をあくかれそむるかとして成けり

女どもの沢に若菜つむをみてよめる

347 しつのかかゑくつむさはのうす氷いつまでふへき我身なる覽

四位して殿上おりて侍ける比、鶴鳴皋といふ事をよめる

藤原公重朝臣」^{59ウ}

348 昔みし雲を恋てあしたつのさはへになくや我身なるらん

新院六条殿におはしましける時、月のあかく侍ける夜、御舟にた

てまつりて、月前言志といふことをよませ給けるによめる

右近中務教長

- 349 三日月のまた有明に成ぬるやうき世をめくるためしなるらん
桜花のちるをみてよめる 藤原実方朝臣
- 350 ちる花に又もやあはむおほつかなその春までとしらぬ身なれば
世中さはかしくきこえける比よめる^{60オ} 増基法師
- 351 あさなく鹿のしからむ萩のえの末葉の霜のありかたのよや
秋の野をすきまかりけるに、おはなのかせになひくを見てよめる
源親元
- 352 花す、きまねかはこ、にとまりなんいつれの野へもつの栖そ
心ちれいならずおほされける比よみ給ける 四条中宮
- 353 よそに見しに小花かす糸のしら露はあるかなきかの我身成けり
世のなかはかなくおほえさせ給けるころよま^{60ウ} せ給ける
花山院御製
- 354 かくしつ、いまはとならむ時にこそくやしきことのかひもなからめ
入あひのかねの声をき、てよめる 和泉式部
- 355 夕くれは物そかなしき鐘のをとをあすも聞へき身とししらねは
大納言忠教みまかりにける後の春、うくひすのなくをき、てよめ
藤原教良母
- 356 鶯のなくに涙のおつるかな又もや春にあはむとおもへは
はかなきことのみおほくきこえける比よめる^{61オ} 法橋清昭
- 357 みな人のむかしかたりに成ゆくをいつまでよそにきかむとすらん
夏のよ、はしにいてゐてす、み侍けるに、ゆふやみのいとくらく
侍りければよめる 神祇伯頭仲
- 358 この世たに月まつ程はくるしきにあはれいかなるやみにまとはん
病おもく成侍にける比、雪のふるをみてよめる 良暹法師
- 359 おほつかなまたみぬ道をしての山雪ふみ分てこえんとすらん
大江拳周朝臣おもくわつらひてかきりに見え^{61ウ}侍りければよめる
赤染衛門
- 360 かはらむといのる命はおしからてさてもわかれんことそかなしき
病おもく成侍はへりにければ、三井寺へまかりて京の坊にうへを
きて侍ける八重紅梅を、いまは花さきふらん、みはやといひけれ
は、おりにつかはしてみせければよめる 大僧正行尊
- 361 此世には又もあふまし梅の花ちりくならむことそかなしき
その、ち程なくみまかりにけるとそ^{62オ}
人の権をとらせて侍ければよめる よみひとしらす
- 362 この身をはむなしき物としりぬればつみえんこともあらしとぞ思ふ
題不知 増基法師
- 363 我おもふ事のしげきにくらふればしのたの森の千枝は物かは
大江以言
- 364 あしろにはしつむくつもなかりけりうちのわたりに我やすま、し
大原にすみはしめけるころ、俊綱朝臣のもとへいひつかはしける
良暹法師^{62ウ}
- 365 大原やまたすみかまもならはねはわかやとのみそ煙たえたる
たいしらす 賢智法師
- 366 涙河そのみなかみをたつぬれば世をうきめよりいつる成けり
此集撰侍とて、家の集こひて侍ければよめる 太政大臣
- 367 おもひやれ心の水のあさければかきなすへきことの葉もなし
周防内侍尼になりぬとき、ていひつかはしける 大藏卿匡房
- 368 かりそめのうき世のやみをかき分てうら山しくも出る月かな
法師になりて後、左京大夫頭輔か家にて^{63オ}帰雁をよめる 沙弥蓮寂
- 369 かへる雁にしへ行せは玉章におもふ事をはかきつけてまし
題しらす 読ひとしらす
- 370 身をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつる成けれ
藤原実宗

- ひたちのすけに侍ける時、大藏省のつかひともきひしくせめければ、匡房にいひて侍ければ、遠江にきりかへて侍ければ、いひつかはしける
 太后宮肥後
- 371 つくは山ふかくうれしと思ふかなはまな橋にわたす心を
 下藤にこえられて、堀川関白のもとに侍ける」人のもとへ、おと、
 にもみせよとおほしくてつかはしける
 大中臣能宣朝臣
- 372 年をへてほしをいた、くくるかみの人よりしもに成にけるかな
 白河院位におはしましける時、修理大夫顕季につけてまうさする
 事侍けるを、宣旨の遅く、たりければ、その冬ころいひつかはし
 ける
 津守国基
- 373 雲の上は月こそさやにさえわたれたまと、こほる物やなになる
 返し
 修理大夫顕季
- 374 と、こほることはなけれどすみ吉のまつ心にや久しかるらむ」
 新院位におはしましし時、うへのをのこともめして述懐の哥よ
 ませさせ給けるに、白河院の御ことをわする、時なくおほえ侍り
 ければ
 大納言成通
- 375 しら河のなかれをたのむ心をは誰かは空にくみてしるへき
 堀川院御時、百首哥中によめる
 大藏卿匡房
- 376 も、とせは花にやとりてすくしてきこの世はてふの夢にそ有ける
 むすめのさうしをか、せけるおくに書つける
 源義国妻」
- 377 この本にかきあつめたることの葉をは、その森のかたみとは見よ
 左京大夫顕輔あふみのかみに侍ける時、とをきこほりにまかりけ
 るに、たよりにつけていひつかはしける
 関白前太政大臣
- 378 思ひかねそなたの空をなかわれはた、山のはにか、るしら雲
 新院位におはしまし、時、海上遠望といふことをよませ給けるに
 よめる
- 379 わたの原こきいて、みれば久方の雲るにまかふ興つしら浪
- 後冷泉院御時、大嘗会主基方御屏風に、備中国たくら山にあま
 たの人花つみたる」かたかきける所によめる
 藤原家経朝臣
- 380 うちむれてたくら山につむ物はあらたなき代のとみ草の花
 今上大嘗会悠紀方御屏風に、あふみのくにいたくらの山田にいね
 おほくかりつめり、これを人見たる方かきたる所によめる
 左京大夫顕輔
- 381 いたくらの山田につめるいねをみておさまれる代の程をしる哉
 円融院、堀河院にふた、ひ行幸させ給けるによめる
 曾祢好忠」
- 382 みなかみにさためてければ君が代にふた、ひすめるほり河の水
 ありまの湯にまかりたりけるによめる
 宇治前太政大臣
- 383 いさやまたつ、きもしらぬ高ねにてまつくる人に都をそとふ
 熊野へまうてけるみちにて、月をみてよめる
 道命法師
- 384 都にてなかめし月のもる友に旅の空にも出にけるかな
 播磨に侍ける時、月をみてよめる
 帥前内大臣
- 385 みやこにてなかめし月をみる時はたひの空ともおほえさりけり」
 信濃守にてくたりけるに、かさこしの峰にてよめる
 藤原家経朝臣
- 386 かさこしの峰のうへにてみる時は雲はふもとの物にそ有ける
 藤原頼任朝臣美濃守にてくたり侍けるともにまかりて、その後年
 月をへてかの国の守になりてくたり侍とて、たるるといふいつみ
 をみてよめる
 藤原隆経朝臣
- 387 昔見したるゐの水はかはらねとうつれるかけそ年をへにける
 帥前内大臣はりまへまかりけるともにて、かはしりをいつる日よ
 み侍ける」
 大江正言
- 388 思ひいてもなき故郷の山なれとかくれゆくはたあはれ成けり
 三条太政大臣身まかりて後、月をみてよめる
 前大納言公任

- 389 いにしへをこふる涙にくらされておほろにみゆる秋のよの月
むすめにをくれてなけき侍ける人に、月のあかりける夜、いひ
つかはしける
堀河右大臣
- 390 そのこと、思はぬたにもある物をなに心ちして月をみるらん
あはたの右大臣身まかりにける比よめる^{67オ}
藤原相如
- 391 夢ならて又もあふへき君ならはねられぬるをも歎さらまし
堀川中宮かくれ給て、わさのことはて、の朝よませ給ける
円融院御製
- 392 おもひかねなめしかともとりへ山はては煙もみえず成にき
一条摂政身まかりにけるころよめる
少将義孝
- 393 夕まくれこしけき庭をなかめつ、木のはと、もにおつる涙か
子の思ひに侍ける比、人のとひて侍ければよめる
門院安芸^{67ウ}
- 394 人しれす物おもふおりもありしかとこのことはかりかなしきはなし
兼盛子にをくられてなけくとき、ていひつかはしける
清原元輔
- 395 おひた、てかれぬとき、しこの本のいかてなけきの杜となるらん
天曆の御門かくれおはしまして、七月七日御忌はて、ちりくりに
まかりいてけるに、女房の中にをくりける
よみ人しらす
- 396 けふよりはあまの川霧立わかれいかなる空にあはむとすらん
返し
よみ人しらす
- 397 七夕は後のけふをも憑らむ心ほそきはわか身なりけり^{68オ}
むすめにをくれてふくき侍とてよめる
神祇伯頭仲
- 398 あさましや君にきすへきすみ染の衣の袖をわかぬらす哉
大江匡衡みまかりて又のとしの春、花をみてよめる
赤染衛門
- 399 この春散にし花もさきにけりあはれ別のか、らましかは
- 後冷泉院御時蔵人にて侍けるに、御門かくれおはしましにければ
よめる
藤原有信朝臣
- 400 涙のみたもとにか、る世中に身さへくちぬることそかなしき^{68ウ}
おとこにをくれてよめる
よみ人しらす
- 401 おりくのつらさをなに、歎けんやかてなき世もあれは有けり
人の四十九日の誦経文にかきつけたりける
よみ人しらす
- 402 人をとふ鐘の声こそあはれなれいつか我身にならむとすらん
にぬまりして侍ける女の、まへゆるされて後、程なく身まかり
にければよみ侍ける
四条中宮
- 403 くやくしくもみなれける哉なへて世のあはれとはかりきかまし物を
いなりのとりぬにかきつけ侍ける哥^{69オ}
よみひとしらす
- 404 かくてのみ世にあり明の月ならば雲かくしてよ天くたる神
おやの処分をゆへなく人におしとられけるを、此事ことほり給へ
と稲荷にこもりて祈申ける法師の夢に、やしろのうちよりいひ
たし給ける哥
選子内親王
- 405 なかき世のくるしきことを思へかしなに歎らんかりのやとりに
賀茂のいつきときこえける時、にしにむかひてよめる
選子内親王
- 406 思へともいむとていはぬ事なればそなたにむきてねをのみそなく^{69ウ}
信解品、周流諸国五十余年といふことをよめる
神祇伯頭仲
- 407 あくかる、身のはかなさはも、とせのなかは過てそ思ひしらる、
即身成仏といふ事をよめる
よみ人しらす
- 408 露の身のきえて仏になることはつとめて後そしるへかりける
舍利講のついでに、願成仏道の心を人々によませ侍けるに、よみ
侍ける
関白前太政大臣
- 409 よそになど仏の道を尋ねけんわか心こそしるへなりけれ^{70オ}

410 いかて我心の月をあらはしてやみにまとへる人をてらさん

左京大夫顕輔

(半丁分空白)⁷³

常在靈鷲山のこゝろをよめる

登蓮法師

411 世中の人のこゝろのうき雲に空かくれするありあけの月

(四行分空白)⁷³

(二丁分空白)⁷²

右和歌集一冊者依大覚寺准后所望遂全部写功猶令再読之校合者也

(一行分空白)

于時天文十二年九月廿三日 / (花押 (後奈良天皇)⁷³)

(龍谷大学仏教文化研究所研究員)

(二〇一三年二月一三日受付、二〇一四年五月二六日審査終了)